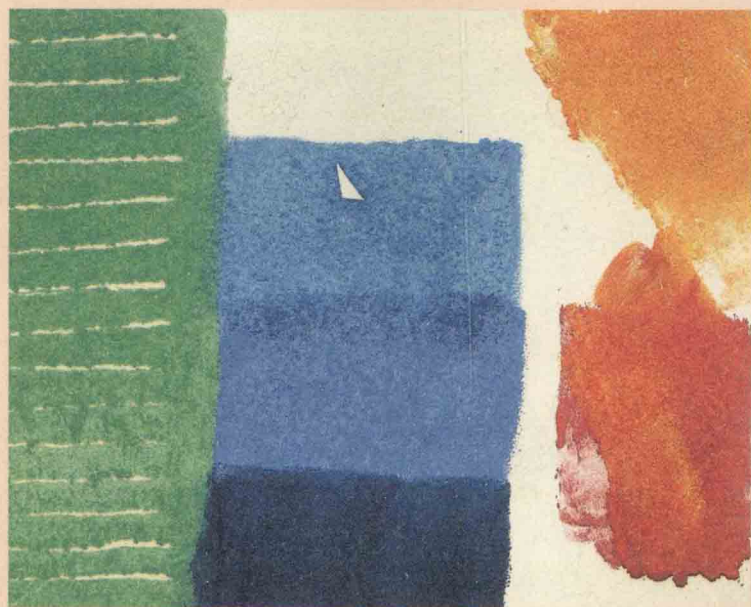


ミツシエルの口紅

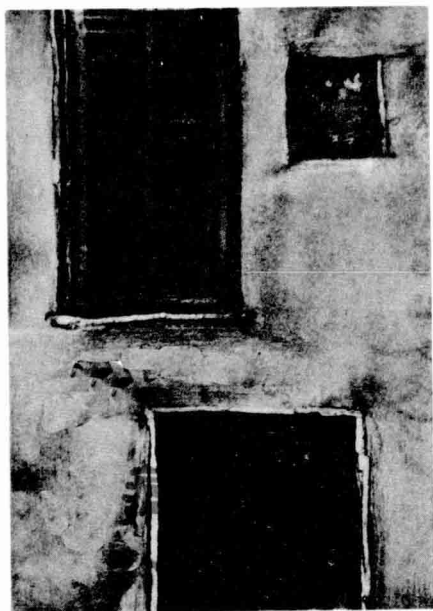
林 京 子



中央公論社

ミッシェルの口紅

林 京 子



中央公論社

ミッシェルの口紅

換印廃止
©一九八〇

定価九五〇円

昭和五十五年二月十日初版印刷
昭和五十五年二月二十日初版発行

著者 林 京子

発行者 高梨 茂

印刷 三晃印刷

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋二―八―七
電話 (五六二) 五九二一
振替東京二―三四

目次

老太婆の路地

5

群がる街

43

はなのなかの道

69

黄浦江

103

耕地

137

ミッシェルの口紅

173

映写幕

209

装
画

駒
井
哲
郎

ミ
ッ
シ
ェ
ル
の
口
紅

老太婆の路地

昭和十二年八月十三日の、第二次上海事変の戦闘をさけて長崎に逃げて来ていた私たち家族は、翌年の四月、再び上海に帰っていった。再び、というのは、昭和七年に勃発した第一次上海事変でも、私たちは、長崎にある伯母の家に逃げて来ているからである。二歳だった私には、その時の、戦いの記憶はない。記憶に残っている最初の戦いが、第二次上海事変である。私は七歳で、小学校の一年生になっていた。

上海に連絡船が着いたのは、長崎港を発った翌日の正午ごろ、淮山碼頭である。ひとあし早く上海に帰っていた父が、淮山碼頭まで出迎えてくれた。私たち家族六人は、三台のワンポウツォに分乗して、虹口地区にある家に向かった。妹を膝に抱いて、先頭のワンポウツォに乗った父が、道を違えるようだったら、大きな声で叫びなさい、と母と姉たちに注意して言った。

淮山碼頭は、黄浦江の河口に近い波止場である。内地から入港してくる連絡船は、殆んどが淮山碼頭に碇をおろす。日本人たちが住んでいる虹口地区からは離れていて、ワンポウツォで四、五十分はかかる。自動車かワンポウツォに乗って、中国人の手を借りなければならない。上海に限らず、異国で自動車やワンポウツォなどの乗り物に乗る場合には、その街の地理に精通してい

なければ、危険だという。父も母も、馴染みのない街では、乗り物には乗らないことにしているが、淮山碼頭の近辺は、歩いていても危険な街である。波止場の荷役で、生活を支えているクーリーたちの街である。軒が低い、迷路のように入り組んだ街は、抗日分子たちが自由に活躍できる、クーリーたちに守られた治外法権的な街になっていた。

一番上の姉と、次女が乗ったワンポツォを中にはさんで、母と私が乗ったワンポツォが、最後についた。母が、ショウロンたちから離れないで、と中国人の車夫に言った。ショウロンとは上海語で、子供のことをいう。車夫は、オオ、と頷いてワンポツォをかかえ上げ、三米とは間隔をあげずに、頭上に洗濯物がはためく細い道を、走って行く。父がときどき、後を振り返って見た。父が振り返ると、セーラー服のリボンをはらめかせて二人の姉が後を向き、母と私が乗っている車がついて来ているか、を確かめる。乗っている者に動かれると、車夫は走りづらくなる。車夫は困って振り返るが、注意も出来ずにただ笑っている。

間隔が三米以上にひろがると、母は、クァティ、急いで、とワンポツォの床を草履の踵でけた。不意に力を加えられた車は、梶棒が上下に揺れてバランスを崩す。車夫は両肩に力をこめて、母の力に耐えている。乗っていると、耐えている車夫の力が体に伝わってきて、そのたびに私は腰を浮かせた。車夫は、不規則な揺れをおさめると、母の要求通りに、前のめりになって速力をあげて走り出した。母の乱暴な行為にも文句ひとつ言わない車夫は、柔和な目をしている。

二人の姉を乗せた車夫も、気のいい笑顔を浮かべている。私たち日本人に、危害を加える人間には思えない。父と母は、車夫たちに拉致されるのを心配しているが、噂になっているほどには、日本人の拉致事件は起きていなかった。噂の芯になっているのは、やらなければやられる、お互いの疑心暗鬼であるが、母は、相手を威圧することで私たちの生命を守ろうとしていた。

ワンポウツォが日本軍の統治下にある虹口地区に入ると、ひどい、と母が言った。市街戦の中心地になった虹口地区は、想像よりも破壊がひどかった。家並みは残っているが、家の内は、砲撃を受けた天井から陽がさして、がらんどろになっている。人影もない。私は、無意識のうちに、発ってきたばかりの長崎の街と比較していた。石畳も、木の新緑も光り輝いていた長崎に比べて、上海の街は暗すぎた。光が暗いのではない。壊れた家の木片や碎けた煉瓦が、ワンポウツォの行く手に散らばって、一つ一つが影をつけているのだ。それらの、秩序のない影が重なりあって、街を暗くみせていた。日本兵が築いたらしい土嚢も、積んだままになって放置されていた。土嚢は、木綿の袋だったように思う。袋の中には土が詰まっていて、機関銃の銃撃にあったのだらう、横一列に弾痕が並んで袋が裂け、土がこぼれ落ちている。人家を盾にして築いてある土嚢の内側は底が暗く、空気が冷たくみえる。虹口地区を準備していた日本陸戦隊の兵隊たちは、人間一人がやっと通れる土嚢の内に身を潜めて、道の向こうから撃ってくる中国の兵隊たちと、撃ちあっていたらしい。ワンポウツォが虹口マーケットにさしかかると、実戦のなまなましさは一層、苛烈に

なっていた。虹口マーケットは、便衣隊が、虹口攻略の根城にした場所である。日本軍の砲撃も虹口マーケットに集中して、コンクリートの壁面は、ささくれ立ってただれている。便衣隊は、遊技場になっているマーケットの三階にこもって、目の下の日本兵を攻めたらしい。攻防の激しさは、土囊の銃痕やマーケットの壁面に見られたが、しかし攻撃の目標は建物や土囊ではなく、私たちの目にふれて残っている弾の跡は、いわば目的を達せなかった流れ弾によるものだった。

車夫たちの歩調が早くなった。エンホ、アンホの掛け声も上ずってきている。母が、トンヤンニンの街だから、もう急がなくてもいいのよ、と車夫に言った。トンヤンニンの街、日本人の街だから不安になって、車夫たちは、一刻も早く走り抜けてしまいたいのである。板戸を打ちつけて、店を閉めている無人のマーケットは、私にも不気味に思えた。

虹口マーケットは、別名を三角市場と呼ばれていた。名前のように三角形の敷地に三角形のビルディングである。当時は、東洋一の大規模なマーケットだといわれていた。私が子供だったせいもあるが、マーケットの入口に立つと、トンネルの口に立った時のように、はるかに遠い前方に、薄明るい出口が見えた。記憶が正しければ五階建てのビルディングである。一階、二階が、野菜、魚、肉類の売り場になっていた。二階に上る階段の段差は四種あるかないかの低い段で、竹籠に入れた野菜や魚を、ずるずると引っぱって上れるようになっていた。売ってある魚は、黄

浦江、揚子江で獲れる白っぽい鱗をした川魚、それと東支那海の魚。特別に張り紙を出した、日本内地から直送される魚など。送られてくる内地の魚は丁寧な葉を敷いた箱に並べて売っている。川魚は、かち割り氷に混ぜて、山に積みあげてある。川魚の買い手は主に中国人で、日本人は、内地から直送された海の魚を買った。一昼夜をかけて船で送られてくる内地の魚は、その日のうちに水揚げされた川魚よりも鮮度が落ちるが、内地からの魚の方が新鮮だといって、筐の葉に並べられた魚を買った。

私の家では、日曜日の朝はパン食に決っていた。パンは、マーケットの入口にある白系ロシア人の店で買った。主人はロシア人なのだが、フランスパンで評判をとっている店である。夕方四時頃になると、焼きたてのフランスパンを売り出す。土曜日の夕方、フランスパンを買いに行くのは私の役目だった。時に、母が、黒パンを買ってくるように言った。黒パンは、フットボールを押しつぶしたような、ひび割れた丸形である。きめが荒く、ほおばると口の中で、もそもそする。バターを塗ってもジャムをのせて食べても、酸味があつた。私には特別にうまい食べ物ではなかったが、黒パンを買うとロシア人の主人は、一等賞と日本語で味を褒めて、渡した。パン屋と並んで、ソーセージばかりを売っている店があつた。この店の主人はドイツ人だった。天井から弓なりに曲ったサラミソーセージや、ニンニクが効いたソーセージがさげてあつた。百グラムとか二百グラムとか、味に馴染みがない日本人が匂をグラムに換算して少量注文しても、吊りさ

げてあるソーセージを斜めに切って、必要な量だけ売ってくれる。母はこの店で、ところどころに四角い脂身が詰まったソーセージを買った。ニンニクがよく効いた店自慢の品である。日曜日の朝、食卓にこのソーセージを出されると、私は原稿用紙の柀目ほどの脂身をスプーン先の先で突き出して、穴があいた桃色の肉だけを食べた。飲み物は、ハーシイのココアである。ハーシイのココアもマーケットに売ってあった。私たち一家の洋食は、フランスパンとドイツソーセージと、一つ覚えのハーシイから進歩することはなかったが、マーケットには、世界各国の食べ物があつた。貧乏人のふところに見合う家畜の肝から霜降りの上等な神戸肉まで、あらゆる階層の食生活を満たす食べ物が、売ってあつた。買物に来る人もさまざまな人種で、耳慣れない言葉が乱れ飛んで、虹口地区で最も活気がある場所になっていた。

三階は遊技場だった。私は一度だけ、ドイツ人の奥さんになつてゐるお雪さんという人に連れて行ってもらつたことがある。照明が暗い広いホールに、コリントゲームやビンゴゲームの台が並んでいた。ビリヤードもあつた。ラシャを敷いた台の囲りに、キューを持って立っていた西洋人の男と女の姿が、印象に残っている。遊技場には、日本人はあまり出入りしていなかったようだ。外国人の出入りが多いせいかな、遊技場は、各国スパイの暗躍の場だと噂が流れていた。実際にそんな噂がたつても不思議ではない地の利を、三角市場は備えていた。野菜、魚、肉類の集積の便利を考えた三角形の敷地は、三方が道で囲まれており、東から荷を運んで来ても、西から来

でも特定の入口まで廻り道をする必要がなかった。三本の道は更に細かく分かれて、上海の裏道に通じていた。建物には、建物を支える柱があるだけで、一階には壁がなかった。三方が吹き抜けになった一階全体が出入り口のようなものである。その三角形の市場を基点にして、人と荷は上海の八方から集まり、散らばっていく。戦争になれば、抜け道だらけの建物は攻めやすくみえたが、難攻不落の城塞に変った。特に人海戦には、効果を發揮したらしい。大陸の奥地から、網の目に敷かれた路地と裏道を伝って送り込まれてくる便衣隊は、尽きることがなかったといわれている。

ワンポウツォは、虹口マーケットの三叉路を抜けて黄浦江に沿った通りに出た。通りはプラタナスの並木道である。並木道の片側には赤煉瓦の家が並んでいる。私たちの家は、その中にある。家並みと平行して、黄浦江は、道の際を流れていた。上げ潮で、水面は道すれすれにせり上り、木の橋でつながれた浮棧橋は、道よりも高くなっている。その黄浦江をつぎはぎの帆をたてたジャンクが、ワンポウツォを追ひ抜いて走りすぎていった。黄浦江は季節によって、狂ったように流れが早くなる時がある。

うちがあった、とワンポウツォの上で伸び上って姉たちが叫んだ。よかった、と母が無傷で建っている家並みを見て、言った。虹口マーケットから歩いて四、五分の距離しか離れていないの

だが、川岸の家は無事で、開戦前と変っていない。

先頭を走っていた父のワンポウツォが、突然、並木道を横に折れた。そして路地に入った。裏口から入るつもりかしら、と母が言った。路地には私たちの家の裏口があった。後について、私たちのワンポウツォも路地に入ってしまった。

三台のワンポウツォが路地に入っていくと、路地の奥の大家の家から明静が飛び出して来た。

ウエイ、ウエイ、と鉄の門の内から私に手を振っている。明静は、大家の家の老太婆、老婦人の小間使いである。私と同じ年頃の七、八歳の少女である。明静の騒ぎを聞いて、アマが家の中から出て来た。アマも老太婆の家の使用人である。母を見て、ニャンニャン、おくさん、と笑いかけて言った。母が、老太婆は、とアマに尋ねた。孫の晨は帰っているが、老太婆は田舎に残っているらしい。金持ちの老太婆は、まだ治安が不穏な上海に帰る気にはなれないのだろう、と父が答えた。貧乏ではないが金持ちでもない路地の人たちは、みんな、逃げた田舎から帰って来ている。彼らは玄関から顔を出して、ニャンニャンと笑顔で挨拶をする。母も、ただいまと日本語で答え、みんな元気でもよかった、と頭をさげる。家族が揃っていないのは、大家の一家だけだった。差配がいるようですね、と母が言った。大家の家の、庭の左隅にある離れの窓がぁいている。その水色のカーテンから、眼鏡をかけた差配の細い顔がのぞき、つるんと光った白い顔が、またすぐに引っ込んだ。差配は小男のイギリス人である。彼は、大家の一家が家を留守にすると、離れ